

ホトトギス

昭和二十四年八月二十八日出版  
平成二十九年八月一日發行  
第四百七十七卷第八号

# ホトトギス

八月号



## 俳句随想 〔三百八十六〕

汀子

私と共に俳句を勉強して来た仲間達は私と同じように年を取って来た。でも頭はしつかりしている。俳句を作るために頭を使うので惚けないという。私も今のところ何とか俳句を作り、選をして今までと変わらない生活が出来ているのは俳句のお蔭であると感謝している。ホトトギス主宰を稲畑廣太郎に譲ったので暇が出来たであろうと喜んでくれる人もいるが、私の仕事は相変わらず多忙であり、何とか仕事をこなして行くために努力をしている。死ぬまでこの環境は変わらないのではないであろうか。そしてその忙しい時間を大切に努力して行こうと思っている。

ずっと隣同志で生活して来た義姉が亡くなった。十八歳で嫁に来て五人の子供に恵まれ孫、曾孫がどっと居て、今年十一月で八十八歳を迎えるところであった。七人兄弟の長女として生れ、弟妹四人に先立たれ、「どうぞ順番に御召し下さい」と祈りを捧げている義姉は元気であった。去年秋、胃癌が見つかって、手術を拒否し一昨日二十五日に亡くなった。生前、綺麗に頭を結い、化粧をしてもらい、写真屋へ行って葬儀の時の写真をとって貰い、素晴らしい写真が用意されていた。

私が旅がちなのを心配して、助けてくれていた。昨日通夜にあずかり、今日は葬儀に出席する。その足で私は上京しなければならぬが、きっと義姉が守ってくれているであろう。すっかり寂しくなった。

# 句日記 汀子

平成二十五年八月四日 下萌句会

体調の戻りしと聞く夜の秋  
演目は 四谷怪談 盆の月  
カンナ燃ゆ萎える日のなき如くにも  
癒ゆる日の待たることも夜の秋  
八月五日 ロイヤル俳壇

朝の夕べ心に乗りたる  
身辺りに失ひしもの星月夜  
考への二転三転 揚花火  
夏負といふほかはなし旅疲れ  
八月八日 清交社

立秋といへぬ陽気も改る  
揚花火何時もその頃旅にあり  
計画は先づ下見より秋に入る  
底紅の紅を納めて散り敷ける  
その頃と知る街路樹の花木権  
ふり返る月日戻らず秋に入る  
八月十日 北海道ホトギス同人会

偲びつつなつかしみつつ旅の秋  
どこまでも新涼の道つづきを  
この晴を北国の秋へと旅路

帯広の秋の懐古の大地踏む  
秋涼の旅路なるべし着陸す  
八月十日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

爽やかにありし旅路に降り立ちぬ  
新涼に旅の期待のありそめし  
八月十一日 北海道ホトギス俳句大会

ななかまど色づきそめし旅心  
影あらば新涼の風ありにけり  
秋暑き家路を思ひつつ旅路  
八月十三日 大阪倶楽部

新涼の旅路はるけくふり返る  
帯広の旅に新涼置いて来し  
欠席の花となる茎上げて来し  
水引の花となる茎上げて来し  
八月十三日 綿業倶楽部

出番なき如くつくつく法師かな  
病葉の落ち継ぐ森にゐてしづか  
法師蟬鳴きつまづくがそれらしく  
八月十七日 東北ホトギス俳句大会前日句会

みちのくの残暑の風あるところ  
影といふ新涼の風あるところ  
八月十八日 東北ホトギス俳句大会

開け放つより新涼の旅の朝  
爽やかに語り継がるものありて  
地震ありし日のままの岩露けしや  
八月二十日 有恒俳句会

満ちゆくは心添ひゆく盆の月

新涼の蝦夷の旅はや遠きかな  
底紅の色失ひし夕べかな  
流星と聞きて旅路でありしこと  
やはり道迷つてをりし新涼に

新涼の風は水音輝かす  
城の道登れば下る汗涼し  
八月二十日 無名会

科ありて一拍ずれる踊かな  
道に沿ふ流れのありて赤のまま  
踊の手上へ上へと華やげる

かたまりて近づいてみて赤のまま  
連組みし若き日のあり阿波踊  
指先が先づ踊り出す踊り込む  
ベテランの踊り引きゆく連のあり  
八月二十一日 夏潮句会

残暑消すには風さやぎ欲しかりし  
癒えられし彼に残暑の案じられ  
この会に西瓜残つてをらざりし  
白粉の花と知りたるまでのこと  
八月三十日 時雨会

初秋と思ふことより家居して  
大の字の消ゆる筆順大文字  
八月三十一日 北とびあホトギス社秋の吟行会

見しことのあるこの景色露けしや  
新涼の風絶えてゐし朝かな  
遠き日を語る秋灯点さばや  
久しぶり残暑ものともせぬ集ひ

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年八月一日 蕉心会

秋近き空と思へばそれなりに  
風に聞く佃祭のプロローグ  
金魚揺れ三角池の歪みをり  
夏萩の雫を留めたる一花  
街騒といふ日盛の狂詩曲  
水打つて館の歳月浮彫りに  
復帰せし人の涼しき笑顔かな  
八月二日 カトリック新聞選者吟  
空梅雨の雲に尖塔突き刺さり  
八月三日 鬼貫俳句大賞  
新幹線 地震に戦く青田中  
八月四日 野分会菅屋例会  
四十六サンチ砲不知火に吼ゆ  
桐一葉風に音階ありにけり  
音の無き楽を奏でて桐一葉  
カシミールカレー不知火指呼の店  
不知火に有明湾の蘇る

八月八日 土筆会

終戦の日の我が影の濃かりけり

大豆引く空の機嫌でありにけり  
大豆引く大地の色を道連れに  
新秋の歩はアスファルト避けてより  
ヴィオロンに終戦の日の音色あり

八月十一日 北海道ホトギス同人会、大会

降り立てば江戸の残暑を忘れもし  
秋蟬の音色は蝦夷のものとして  
初秋のいよいよ白き白樺  
地の果てがあるとも思ふ蝦夷の秋  
飛機揺れてより秋空に突入す  
日本の新秋蝦夷に始まり  
馬鈴薯の旨さを秘めし大地かな  
東京の残暑は夢であれかしと  
キャンパスに吸ひ込まれゆく残暑かな  
鞭打たれたる馬の目の秋思かな  
八月十三日 GOGOバンド観劇  
感動の涙残暑を忘れさせ  
八月十五日 登高会  
三瓶野やベガより銀河流れ初む  
朝顔に鳥語目覚めてゆきにけり  
朝顔に色の余白といふ朝  
蝦夷の秋蹄の音に始まり  
天の川無限子の夢無限かな

八月十七日 東北ホトギス俳句大会

新涼の風は鉄砲狭間より  
虚子の文字一字に執す生身魂  
ダム湖とは露の一粒より生るる  
この底に生活沈めて水澄める

八月十九日 朝日カルチャー若草句会

流灯や一つは未練遣し消ゆ  
流灯の還りゆく闇濃かりけり  
花茗荷とは童顔でありにけり  
騙されし火花に映ゆる横顔に  
八月二十五日 野分会東京例会  
丸の内一葉の秋といふ人出  
不知火の数の英霊呼び覚ます  
八月二十七日 若水句会  
残暑解く詩人の心戻しつつ  
新しき人とは知己や残暑解く  
八月二十八日 目黒学園句会  
蛸や六甲山を母として  
朝顔の日記三十一日目  
星飛んで皆んな眠たくなりけり  
朝顔と目覚めを競ふ吾子早寝  
八月三十一日 ホトトギス社吟行会  
残暑解く鉄道模型めく俯瞰  
霧霽れてスカイツリーの伸び上がる  
電波塔二つ見えたる街残暑

# 雑詠

## 廣太郎 選

三月や深き祈りの一と日あり 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 膝頭炬燵塞いでふと淋し 同  
 春塵を払ひぼろんと弾いてみる 同  
 春塵に物の形の残りけり 袋井 湖東紀子  
 春塵に日向の匂ひ満ちてをり 同  
 植ゑられる時を静かに菊の苗 同  
 デパートの雛市を見る背伸びかな 我孫子 副島いみ子  
 気に入らぬ顔もありけり雛の市 同  
 雛市に女心の高まりし 同  
 我がこころ潤みてあれば春の星 榎原 稲岡 長  
 春の蚊の生活の水に生れけり 同  
 咲き満ちし花に漲る力かな 同  
 白無垢の梅の香りに日当れる 福山 竹下陶子  
 卒寿吾の貌の映りし雛鏡 同  
 草萌えて万葉の野に詩おこる 同  
 野の花を手向け雛を流しけり 神戸 山田佳乃  
 鼻すこし伸びたるやうな春の風邪 同  
 若鮎のさ走り水の目覚めゆく 同

風神の見とれて吹かず朝桜 東京 大久保白村  
 花疲食欲だけは衰へず 同  
 灯を消してくれ夜桜が見たいから 同  
 山笑ふ人の生活に裾野貸し 香川 湯川 雅  
 耕人の伸ばして腰の伸びきらず 同  
 春光を砕く春光なりしかな 同  
 初島をせに置ききたる薄霞 渋川 木暮陶句郎  
 春愁や長き手紙の嘘ひとつ 同  
 春雷に幹青ざめて樨大樹 同  
 初花に迎へられたるけふの客 長岡 安原 葉  
 山を盛り谷を埋めし花の雲 同  
 あの花の雲より下りて来し我等 同  
 人を恋ふごとくに日脚伸びにけり 熊本 岩岡中正  
 ことに鶉の頸のあたりの春寒し 同  
 週末の春日が眉のあたりかな 同  
 働きに働き夜桜に集ふ 神戸 藤井啓子  
 花惜め命惜めと杯高く 同  
 古文書に失せし一文字亀の鳴く 同  
 ものの芽に触れては土に消ゆる雨 東京 川口利夫  
 黒々としづくの走る梅の幹 同  
 満席のテーブルカーにありし春 同  
 陽光の七色回すしやぼん玉 神戸 涌羅由美  
 丁字の香ほどけ明日へとつながりぬ 同  
 丁字の香風の起伏に素直なる 同

## 雑詠句評（七月号より）

憲明・千鶴子・保佳  
美奇・葉・静龍  
中正・眞理子・とほ歩  
むつみ・廣太郎

### 絵踏なき世や教皇に拝謁し 神戸 千原叡子

教皇は、使途ペトロの後継者と信ぜられるローマの司教。ローマ法王。昭和六十二年、汀子先生は、ミュンヘンで「俳句にとつての季題の意味」の講演などなさった旅で、バチカンでは教皇ヨハネ・パウロ二世に謁見。「日本でも一流の俳句の詩人の方が私に会いに来て下さった」と迎えられた。その俳人のお一人に叡子さんはおられたはず。「俳句は短い言葉の中に深い意味をこめる芸術」と深い理解もいただいている。その感激はずっともちつづけられていて、この句にもなったであろう。日本伝統俳句協会設立の年の三月のこと。「絵踏なき世や」にこめる心は大きい。

「踏絵」はキリシタン迫害の歴史とともにあった。多くの殉教者も出た。踏絵のない時代に、日本にいて俳句にいそしむことのできるよろこびをかみしめておられる。（憲明）

実際当時の教皇ヨハネ・パウロ二世に拝謁された作者なのである。確か日本伝統俳句協会関係のヨーロッパへの旅行で、稲畑汀

子が団長として行き、筆者は残念ながら行けなかったが、その後土産話を羨ましく聞いた記憶がある。この歴史ある季題が、余韻豊かに詠まれている。（廣太郎）

### 銀座の灯恋うて来してふ雪女 相模原 木村享史

戦友だと言っておられた奥様を亡くされた享史氏は、どうなることかと私は一刻心配していた。ご自身もペースメーカーを入れておられるとのことであつたし。しかし悠々とした大人の風格は全く変わらず、偉い方だなあと御尊敬申し上げている。藤松遊子氏の亡きあと、「花鳥詠詠」の仕事も引き受けられて、今や八面六臂の活躍をしておられるが、どこか悠々として迫らず、相手を生かしておられること、偉いと言いたいようがない。

掲句は、氏の近ごろの傾向の一つである思い切った表現というか、超ロマンチックな句というか、我々年配の一つの方向を試みしておられる句として、ゆつくり落ち着いて味わってみたい句である。霏々と降る銀座の雪の中に立つて。（千鶴子）

筆者が「雪女」に会ったことがあるのは何度も色々な機会に申し上げたが、ロケーションとしては新潟等の雪国であった。この句では何とも都会的な雪女が描かれている。確かに最近の東京は結構雪も多いので、雪国から遠征して来るのだろうか。華やかな佳人を思い浮かべて、是非会ってみたい。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

心子選

春を逝けり句道ひたすら七十年  
 春の雨服喪の家に音もなく  
 貫きし看取り十年や梅ふふむ  
 大朝寝して雨音を聞く忌明け  
 賓客を迎ふ拍手も花の宿  
 最高の花に宿にも別れ惜  
 太陽に笑はれながら大根引く  
 冬構して名苑の縮みゆく  
 春眠や吉野の夢のつづき見る  
 春暖炉焚きて店主の待ちくれし  
 雛飾り独り暮らしでなくなりし  
 雛納して天井を眺めをり  
 しろがねの月に眠れる雪割草  
 草萌えて花鳥諷詠敷きつめし  
 砂丘にもありしオアシス水温む  
 もう母は在さねど親し母子草  
 初蝶のやはり黄色でありしこと  
 桜湯のさくらさくらと花ひらく

吹田 大橋 眺  
 同  
 千葉 大木さつき  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 榎原 稲岡 長  
 同  
 我孫子 副島いみ子  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 神戸 後藤立夫

枝抜ける動きしなやか春の雪  
 枝ぬけてくる雪片は春のもの  
 倚松庵春のストーブ焚きて客  
 春寒し書架に隙間のとこどころ  
 伊豆高原駅に下車即花吹雪  
 花吹雪ぶつかりし今日なりしこと  
 幸せな日も降る雪でありにけり  
 天地のまだ引きずつてゐる余寒  
 母子草摘むうちの子もよその子も  
 春雷のひびきかすかに卓の薔薇  
 春雷や謁見のあのローマの日  
 浴びるままとは心地よき花吹雪  
 やはらかな日差しの中にある余寒  
 あなどれぬ一人暮しの春の風邪  
 大雪の音無く夜を迎へけり  
 有り難うが言へて病む妻春めける  
 音一つ残して真昼春の雷  
 鳥帰る自づと恙無き祈り

岩見沢 奥田智久  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 熱海 嶋田一步  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同  
 東京 川口利夫  
 同  
 仙台 赤川誓城  
 同  
 吹田 宮崎 正  
 同

## 蟬時雨

### 稲畑汀子

北海道への旅で耳がおかしくなったが、飛行機から降りたら、何時ものように唾を飲み込んでいるうちに治るであろうとたかを括っていた。

「ただいま」

何となく、声が籠もっていておかしい。

「お帰りなさい」

芦屋の家に帰り着くとほっとする。

「まだ、居てくれたのね、」

通いの手伝いの鈴木さんがまだ居てくれた。

「これで失礼します」

鈴木さんは夕食の支度をしたからと言って帰って行った。さすがに旅が続いたので、留守の間の仕事が溜まっていたが、今夜は早く寝ることにした。

朝目が覚めると何時もすっきりするのであるが、何となく耳が聞こえない。九時過ぎに来る鈴木さんを待って、耳鼻科の病院へ行くことにした。

「鈴木さん、ハザマ耳鼻科まで行って来るわ」

「私の車で送りますよ、うか？」

「行ってくれる？」

自家用車で通勤しているお手伝いさんをたまには利用させてもらうことにする。

「承知しました」

子供たちが小さい時、何度もお世話になった耳鼻科である。自分はまだ耳を患ったことはなかった。

中耳炎は治ったが、聞こえにくい耳はすぐには治らなかつた。

「これ以上はお歳のためということになりますから、補聴器をお使い頂くこととなりますね。紹介状を書きますから、そこへいらして下さう」

実際、毎週飛行機で大阪と東京へ往復して五十年ほどの歳月が経っている。気圧の変化に対応出来なくなつて耳が聞こえにくくなっているのかも知れなかつた。

まだ仕事をしていかなければならないのであれば、耳が聞こえにくいなどという粗相があつてはならないのである。

私は意を決して耳鼻科の先生の紹介状を持って西宮の補聴器屋さんに行くことにした。場所は国道二号线に沿ったビルの二階の分かり易い所であつた。様々なテストを受けた。耳の穴の型を取つて、十日程で出来上がるという。よく聞こえるようになるとい

うのが嬉しかった。

我が家で句会が始まった頃、勉強会をすることになった。「言葉の渚」と名付け、俳句以外のことを勉強してきて発表するという会であった。千原草之さんが「ON OFF 現象」という話をされた。それは、人間の能力には、自然に音を聞き分ける時に雑音と必要な音を聞き分けて、雑音は聞き取らないようにする能力がある。ということだった。

「へー？耳に入ってくる雑音は聞かないようになるのかしら」  
「その筈ですよ」

そのことは頭の中にいつまでも忘れることがなかった。

補聴器が出来たという報告が届いた。用意した大金を鞆に入れて伺った。

「こんなに小さいのですか。耳から出なくなりませんか？」

「型を取って作りましたから大丈夫です。お慣れになるまで、雑音が気になるかも知れませんが……」

早速耳に入れてみた。がーんがらながら、何の音とも分からない音が色々する。会話の声はよく聞こえる。

約束の調整の日に尋ねた。

「如何ですか？」

「少し慣れました」

実際、雑音らしきものが少しずつ減って来ている。

「毎日、蟬時雨の中にいると思えばいいのだわ」

その蟬時雨も何時からか何となく遠ざかって行きつつある。声がすっかり聞こえるのが嬉しかった。

